

問題

ミルズの「パワーエリート」について、リースマンの多元主義と比較しながら説明せよ。

解答のポイント

① ミルズのパワーエリート論

- a) 政治・経済・軍事のトップエリートであること、
 - b) 3 グループは競合関係ではなく結託していること（権力が一元化していること）、
 - c) 第二次世界大戦後（1950 年代）のアメリカの状況であること、
- の 3 点は書いておきたい。

② リースマンの多元主義

「拒否権行使集団」という言葉と、それが競合関係にあることで権力の一元化を阻んでいることは触れておきたい。

③ ミルズとリースマンの比較

ミルズは権力の一元化、リースマンは権力の多元化を主張している点は必須である。それに加えて、中間水準の組織が衰退していると捉えるか、むしろ中間水準の組織が活発化して権力の歯止めとなっていると捉えるかについても書けるとなおよい。

上記のうち、少なくとも「政治・経済・軍事のトップエリートによる一元化」、「拒否権行使集団の競合による多元化」という点は必ず述べておく必要があるだろう。

解答例

「パワーエリート」とは、権力構造の制度的秩序の頂点で支配的な地位を占めて主要な政策決定に影響力を持つエリート集団のことである。アメリカの政治社会学者 C. W. ミルズは、著書『パワーエリート』において、大衆社会化した 1950 年代のアメリカでは、政治・経済・軍事エリートの 3 グループが結託して大衆を支配していると批判した。権力はこれら 3 領域の組織の頂点に集中し、そこに身を置くごく少数のパワーエリートたちが、視野狭窄に陥った大衆をマスメディアを通じて思うままに操縦し絶大な権力を行使するという。

ここで政治エリートとして想定されているのは、大統領・副大統領・閣僚・主要官庁の長官など行政府のトップ層であり、立法府たる議会のメンバー（政治家たち）は格下に扱われている。三権分立の制度が徹底されているアメリカでは、立法府は行政府を監視する機能を果たすはずだが、ミルズによれば、ニューディール政策以降、行政府の権限が著しく強大になり、立法府は政治権力の中間水準に転落し、その機能も縮小されている。ミルズは、このようにエリートに権力が集中する大衆社会の危険な側面に警鐘を鳴らすとともに、社会構造に対する鋭い批判意識を「社会学的想像力」と呼んで、その獲得・浸透を通じた真の民主主義の実現を説いた。

これに対してアメリカの政治社会学者 D. リースマンは、著書『孤独な群衆』において、現代社会では様々な分野で多様な利害関心を持つ利益集団が活動し、その中には自己の集団に不利益な影響を及ぼす政策・決定の実現を拒否する力まで持つ「拒否権行使集団」があるために、決定的な権力を持つ主体は存在できなくなっていると主張した。

ミルズのパワーエリート論では、権力と大衆との中間水準にある組織が衰退することによって権力の一元化が進行していると捉えるのに対して、リースマンは中間水準にある強力な拒否権行使集団が競合状態にあり、それぞれが自己防衛の力を行使することで多角的な権力構造になっていると捉える点に違いがある。

以上
(836 字)

TAC 生はココで解けた！

専門記述対策（政治系）テキストレジュメ P. 96 に掲載している予想問題，また社会学分野での出題ではあるが，P. 117 に掲載している東京都 I 類の過去問，P. 146 に掲載している国税専門官の過去問は出題内容が関連しているため，こちらをしっかりと学習していれば部分的には書くことは可能であった。ただし，十全に書くのは難しかっただろう。